

善光寺道名所図会

嘉永二(1849)年。豊田利忠著。美濃屋伊六刊。

善光寺道名所圖會卷之四

目録

とがくしやまのみたに

○戸隠山三谷

ちうあん

○中院權現

くま たう

みたらしがは

一の牛王橋

日の御子の

社 兒櫻

こゝろはな

十王堂

諏訪社

かぐらでん

二王門

秋葉の社

朱の鳥居

けうざう

經藏

橋供養塔

本坊

本社

御供所

三本

杉 弁才天祠

神輿庫

手水鉢

鐘樓

百幅名号

十二

院 宝物

戸隠領

戸隠一の鳥居ハ石にて飯繩原にあり

はうくわうあんごんげん

○寶光院權現

ほんしや

本社

神樂庫

荒神の社

神輿庫

鐘

楼 奥の院道條

おく むんみちすぢ

瑪瑙山

めなう

女人堂

兒の塔

山の神の

祠 長明火定所

一ツばし

制札

あけ 朱の鳥居

二王門

法華堂 さかさ川

下馬石

觀音堂

おく むむ ○奥の院

本社

神輿庫 九頭竜權現宮

御手洗の滝

御供所 岩窟三十

三 寺中十二院

○御裏山

たかつま

○高妻山

おとつま

○乙妻山

投

の忝

札盤石

十三佛

飯繩の宮 ○二季の祭

にき

○紅葉

もみぢ

狩がり ○鬼無里きなさ ○浦見の山うらみ 是より善光寺へ皈り本街
道登りを記す

(目錄一頁略)

善光寺道名所圖會卷之四

飯繩いひづな奥岳より根笹原の兔徑ほそみちを一里ばかり下りて戸隱の

中院に到る

○戸隱山 中院權現おもひかねのみこと思兼命本地寶光院權現本地表春命本地

奥院手力雄命おくのあんたちからをのみこと別當天台勸修院べつたう兩界山くわんしゆ頭光寺りようかい三谷けんくわう

一山坊舎いつさんぼうしや凡三十六院東鑑頭光寺天台末云拾芥抄曰戸隱山影光寺古仏遊行所云影宜作頭九頭龍くづりうの窟いはやは地主じしゆ

神じん九頭龍ま權現まいや每夜米三升炊カシクレ之ナシ並ナシ以ナシ二梨子ナシヲナシ為ナシ二神ナシ・供ナシト

一云
二云

和漢三才圖會

戸隱明神 在ニ戸隱ニ 在ニ善光寺之ニ 社領千石別當天台三年苦行シテ勤レ之又歴三年ヲ一交代ス

祭神 手力雄ノ神天思兼命之子 伊勢内宮相殿ノ左ニモ亦祭レ之

押ニ開玉ヒテ天盤戸ヲ一抛ツレ之ヲ其ノ盤戸落ツト于此ニ一云

常陸国志津ノ
社亦同一躰

九頭龍權現 傳テ曰神形九頭ニシテ而在ニ岩窟ノ内ニ一以
テ梨ヲ為ニ神供ト一毎夜丑ノ刻未タレ春米三升備フレ之疑ク
ハ此レ當山地主ノ神乎為ニ神秘一

○昔シ當山ニ有テニ妖賊ノ隱棲一惑ハスレ人ヲ平ノ維茂殺スレ之
ヲ平ノ維茂ハ兼忠カ子也伯父前ノ將一軍平貞盛為ニ養
子ト一字ヲ曰ニ餘五ト一世ニ称ニ餘一五將一軍ト一是也武ノ名赫ニ
著于東州ニ一一旦潜ニ身ヲ池水ニ一避ニ急遽ノ之難ヲ一得レ殺
ヲニ其ノ冠奥州澤勝ノ諸任ヲ一又入ニ戸隱山ニ一手ニ刃妖賊
ヲ一其ノ勇銳ノ之氣可ニ以テ觀ツ一焉

(以下地形の絵図の頁・絵図を略し文字のみ載せる)

北 乙妻 高妻 劔の峯 金沢

弘法大師ごまだん岩 水晶塔 水晶ノ鳥居

八尺ノ圓鏡岩 両部ノ大日 投の松 戸隱山 木王廻

り十八尋半 千丈が瀧 文珠屈 此穴廣サ百廿間

土倉村 東京 吉田ノ社 内裏屋鋪 西京 春日社

奥の院 びくに石 中院 宝光院 楠川村 上墅村

一夜山 加茂社 根上り松

(以下地形の絵図の頁・絵図を略し文字のみ載せる)

もみぢかりめいしよ づ
紅葉狩名所之圖

此圖ハ其所にもち傳つたへたる人のを縮寫しゆくへしやして爰こゝに出せり

あんど岑 角岩 いぬき岩 霞岩 維茂柳 上野村

くす川 鬼ノ釜 屏風岩 鬼が城 鬼無里村

をり橋 一条村 栃原村 あしだが原 ふすのたい

ら 鬼と酒宴の座也

鬼塚 矢竹八幡 しかき村 追通村 いかづち村

口ばし岩 小ふじ山 駒せり岩 矢坂 維茂足跡岩

しからみの橋 宮尾村 ぢごくの火 おうばかいわ

屋 虫倉山 松茸岩 かさ岩 きりふり瀧 南

(絵図終わり)

戸隠山ハ巉然屹立として東に秀ひいづ越中の列岳西に争あらせひ

聳そびへ北には妙高山あり中に安曇郡を帯おびて遙はるかに眺のぞめバ山

ハ布しきたる碁石のごとしされバ山深して人跡稀じんせきまれにいにし

へ妖賊楯ようぞくたてこもりて民の害かいをなしたること知られたり世よ

にいふ源満仲戸隠山の鬼神きしんを平たいらげ美濃國中川の山賊さんぞく

を討うつ 源満仲為三信濃守ト年代可ニ追考一 中川按に神名式惠奈郡中川神社其地平
村上田融花山三代奉仕轉任八國云云 〇なり或は今の中津川なりともいへり

又云平維茂戸隠山の鬼を斬と又曰源頼義戸隠山の鬼

を斬と太平記に見へたり或曰田村丸鬼神退治と云以

たいへいき
しやうぜついまだ つまひらかならず

上正説未レ 詳

日本書紀

ちとう

持統天皇五年八月遣^二使者^一祭^二信濃國須波水内等

かみを

神^云按に水内等神は即戸隠神社なるへし天平年中

みとぼり かんざう

神帳を勘造とあれバなり

夫木

信濃路や風のはふり子心せよしらいふ花の匂ふ

神垣

家長朝臣

たぐち

ゆく

荒安村より直に戸隠の中院へ行にはまづ荒安より一里

登り入坂を越え又一里餘飯繩原^{即飯繩本岳のふもと}なりをゆけば戸隠一

へん

とがくしりやう

しゅべい

の鳥居あり石の大鳥居なり此邊より戸隠領にて守護不

にう

入の地なり此鳥居より中院權現まで五十三丁あり一丁

ごと せきへう

くま

たう

熊の灵

ごわうばし

たらし

毎に石標あり○熊の塔^{熊の灵を祭る}○一の牛王^{を祭る}○御手洗川○

日の御子の社○児桜^{西行桜ともいふ日の御子の社頭に在今ハ植次の垂桜也}

○二王門^{外には宿屋あり内は坊社なり}

あけ

○十王堂○秋葉社○諏訪社○朱の鳥居○神樂殿○經藏

きやうく やうたふ

○經供養塔○三本杉○一山山谷の本坊両界山勸修院顯

たていし

光寺^{天台宗なり叡山より入院}門前に立石あり守護不入別當社職勸修院と

こく

刻す○辨財天祠^{本坊の南に池中にあり宝光院への近道あり}○手水鉢^{秋葉社巳下此迄石垣の下にあり}石階^{せきかい}を登^{のぼ}

りて○中院本院の東に在權現本社祭神思兼命○神輿庫本院の東に在○御供所

同西にあり○鐘樓同辰巳の方あり

戸隠領千石内二百石神主栗田氏へ配當栗田ハ上墅村に住ス外ざうえいりやうに造営料三百石御供米料八

十三石なり中院坊舎十二院宝藏院 正智院 寿教院 行勝院 撰善院 實道院 十輪院 徳善院 覺照院 智泉院 杏樹

院實泉院以上

ぎやうしやうみん ひやくかく行勝院おきに百幅ちよくかんの名号を藏かうふむ縁起ちよくかんに人皇八十三代土

御門院しょうげんの御宇ちよくかん糝元丁卯年親鸞聖人勅勘ちよくかんを蒙り越後

へ配流はいるくわういん光陰五年けんりやくを経て建曆辛未子月中旬七日岡崎中

納言のりみつきやう範光卿ちよくめんを以て勅免ちよくめんありきしかれとも猶更彼地に

化くわを施ほどこさんため為ために同二年の春ふたゝびた関東をこゝろざ

し給かひ信濃路かにかゝり飯繩山の麓かにて御弟子かに仰かけ

るハ西かに見ゆるは戸隠山かなり迦葉か仏説法かの峯殊かに垂か

跡しやくハ手力たちから雄命をのみことちんしゆこくか鎮守れいぢやう國家わうはうぶつはふの灵場さかりにて王法さかり仏法さかり今さかりを盛

に弘ひろまる事ひとへ偏みんかみに御神あとかの遺徳まうでなればまうでいそぎまうで詣まうでんとて道

をまひげて登ひり給ひふ其ひむかし我ひ比叡山むどう無動寺ありニ在ありし時

戸隠ようちの行勝院がくいうハ幼稚なからへの學友なからへなるがなからへいまだ存命なからへますら

んと尋たづね給たづふに行勝院いでむかハ出迎じぼうへ其い俣い自坊いに請いじ入いれ

去いし昔いの物語いそれより御宮さんろうへ参籠さんろうましくす既に奥すの

院より両界山まで七里の道峨々たる岳山なれば召も
習はぬ御草鞋小竹の杖を力とし投の姿をつたひつゝ
札盤石に至り給ひ御經讀誦し給ふ夏一百日の間なり
通ひ給ふ日毎に名号をかきたまひ百幅成就ありて未
世の衆生浄土往生證據の為にとて行勝院へ授與し
給ふ下畧

中院寶物 ○笛二管○手力雄命の面○同御笏○猿田彦の面

○龍の面○伊弉諾尊の面○法華經一部武藏坊弁慶筆

○維茂將軍の太刀○弘法大師の唐鈴金○神祖御乘鞍一口

△時を打事午と酉ハ鐘其外ハ太鼓なり 宝光院 奥の
院とも太鼓と鐘にて時を打事中院に准ず

(以下地形の絵図の頁・絵図を略し文字のみ載せる)

戸隠山一ノ鳥居

中院權現

宝光院權現

其一

戸隠や葉隠しの山やけさの雲 桃路

かうくし戸隠の藤松ひの木 涼菟

飯縄原

戸隠一ノ鳥居

大久保村

(以下地形の絵図の頁・絵図を略し文字のみ載せる)

其二

中院権現

鐘樓

神輿倉

本社

諏訪社

神楽殿

經藏

別當所

丁家

丁家

アキハ

二王門

十王堂

町屋

弁才天

日の御子社

西行桜

拝殿

社家^侘?

ふじみ山

みたらし

飯縄社

熊の塔

小鹿沢

(以下地形の絵図の頁・絵図を略し文字のみ)

山ノ神

女人堂

奥の院道中院より三十丁

宝光院ごんげん

本社

神輿倉

鐘樓

荒神

神楽殿

二王門

諏訪社

地蔵

十王堂

(絵図終わり)

○宝光院権現ハ一の鳥居より廿八丁目大久保村の分れ口わかに

傍示はうじの石標有左へ入り男鹿沢おしかさわの橋をわたり又分れ道あり

右は権現道左は鬼無里道きなしみちなり裏の側左に前原地藏堂同く

神明宮あり二王門を入れて左右に坊舎十二院あり

延命院 教釈院 玉泉院 安樂院 廣善院
智照院 福壽院 法教院 淨智院

普賢院 善法院 偏照院

附言ふげん遠州秋葉三尺坊は教きやうしやくぬん釈院の住侶にてありしが後に天てん
狗道ぐに入と二云云

塩尻

秋葉山の勸音きやうぎだいしハ行基大士の作にしていと古き靈場れいじやうな

り三尺坊は三百年以来山に祭このかたる信州戸隠まつの飯繩いひづなを勸くわん

請じやうと云云されば古縁起等の正ふるきえんぎとうしきハなしと彼山かのの修験しゆげん

者じやいへり乙未五月八日快善院談なり

石階せきかいを登りて朱の鳥居のほ左右に垂かぐらでん椽くわうじんあり○神樂殿○荒神の祠東西に又石相對す

階をのぼりさいじん壱あり又石階を登りて本社なり祭神表春命

○神輿庫しんよこ本社東在二○鐘楼同所此所より中院へ十二丁の捷徑ちかみちあり

宝光院權現の寶物○牛王の玉東海より上○維茂將軍の太刀これもち(以下

割注) 荒鞍山紅葉狩鬼神退治たいぢの太刀(以上割注)

○俱利伽羅くりからの太刀同將軍○羅漢掛物司筆○雲坐阿弥陀親鸞聖

已上 是より中院へ歸りて奥の院道裏山道をしるす

奥の院道中院本社の右へ付て登三丁目○山右の山手の神ノ社右の山手にあり○女人堂是より内

といふ立石あり堂の内に比丘右越尼の石と成たるありといふ八丁目右に右へ越後の分れ道わかに石標しるしあり

左奥院道左奥越後の方へ一里半入りて裏山道戸隠といふなり左へ入なり○

釋長明火定所右八丁目立石の傍ちうわうにあり凡三十歩ごりんほどの中央ちうわうに五輪ごりんの石塔

右の方に康保三丙子と
記せり此外文字なし

元亨釈書

積長明居ルニ信州戸隠ニ一年二十五ニシテ絶スニ言語ヲ一誦ス

ニ法華ヲ一亦三歳不ニ偃臥セ一日語テ人ニ曰我ハ是一切

衆生喜見菩薩ナリ也来テニ此所ニ一焼クレ身ヲ已ニ三回今

命盡テ上ルニ兜率ニ一便チ積レ薪ヲ入テ内ニ自焚 康

保年中也

五輪高^サ四尺余屋根石三尺四方ばかり臺石高^サ三尺斗上
に梅の木一株有リ

○児の塔^{右にあり}むかし此邊りに養ひ子ひとりもたる夫婦あり
すけにせんとて此山にのぼせ置たり或時女のもとへ外
より文を越したり折しも婦は居^をり合せず男あやしかり
ても文字^{もじ}しらざりければえよまでねたき心にいぶかし
さのまゝよそ目^めはいとはしければ山の児のもとに來り
ていはく

(以下親子の絵図の頁・絵図を略し文字のみ載せる)

或曰淫^{いん}まなれバ棄^{すつ}とこそ禮經にも見へ侍れまゝ母人と文
通す此兒^こなとて実を告て父にはからはしめざるや曰く父
を深く愛^{あい}する人ハ必^{のち}後の母に厚^{あつ}し罪^{つみ}なれども頭^あはさず父

の心を安からしめんが為なり昔晋の太子養母驪姫が為に
身危し人みな驪姫が罪蹟し給へといふ太子いへらくわが
父老給ひて驪姫なければ安からずもし彼が罪をあらはさ
ば父怒りて彼を捨ん我見にしのみならずとなんいひておのれ
殺され給ひぬ其太子と亶ハかはれども父の心を休め母に
も故なからしむることハ相似たりまゝ母も人なり児が心
に恥て過を改めざらめや

(絵図の頁終わり)

此文よみきかせよと取いだしければ披き見て思ふやう
こは有のまゝによみなバ養母も追打たれ父もなやみあ
る事をさつし外の事に取なし讀ければ本より父すこし
も是を疑はず何気なく過しけるその情を感じてかくな
む

信濃なる木曾路にかゝる丸木橋ふみ見し時はあやふ
かりしに

子返し
しなのなるそのはらにしもやとらねとみなはゝ木々
と思ふはかりそ

寔に父のうたがへるに取わき文をよみかへて其難を救

ひし心ばへやさしくこそ此児の塔なりとそ本朝孝子傳
に見えたり

○一ツ橋小川にて右へ流る ○制札右手にあり ○さかさ川壱あり右へ流る ○朱の鳥居十五丁目也

側につ ○下馬石二王門の外に立 ○二王門二十二丁目也 是より内大杉の並木両側に

茂て其根麻を乱すが如く洗はれ出(以下割注)此並木は伊勢の磯部

道に片枝の杉とて列樹ありその如く片枝にして繁茂せり(以上割注)此根を

つたひ行に大岩小岩路傍に轉び出苔むしたる間を攀のぼ

ること十丁ばかりなん御手洗の末滝津瀬なして心耳を澄

せり ○観音堂二十六丁目右手にあり ○法華塔二十七丁目左手に有 ○奥の院十二坊左に十一坊 勸法

院 成就院 佛性院 妙行院 常泉院 安壽院 妙觀院 金輪院 東泉院 真乘院 妙智院 右に一坊 常樂院 此十二院のみ社領の内十

石廿石三十石づゝ配當あり又釋長明ハ妙行院に在住せり

康保三火定に入前に見へたり ○奥の院權現本社祭神手力雄命 ○神輿

庫本社の下タ懸 ○御手洗濯本社の左にあり ○九頭龍權現本社の右に並ぶ ○御

供所同く前の下にあり八月十七日交代翌々年八月出 但し奥の院ハ寒氣甚く

雪また深く定住成がたく十二坊ハみな里の別荘に住して

空院也唯御供所の詰番一人に侍者一人僕一人のみ定住な

り毎朝米三升炊レ之神供とす并に梨子を供ふと也毎年正月

元日に別當顯光寺奥の院へ参詣の節手輿をあんだにのせ

て雪の上を人夫にて引に鳥居の上をゆくといふ鳥居高サ
二丈なり雪の
深き事知るべし抑奥乃院嶽に三十三の巖窟あり各其号圖がんくつ
なづ
に顯然たり東は黒姫山まで山脉續たり西の方さんみやくつぎ八百丈か滝
西光寺跡僧が岩など皆西南にあり一夜山新倉山あらくらやま
紅葉鬼神の
岩窟あり是よ
り鬼無里村に出るきなしむら(以下割注)きなき村の号ごうハ鬼神退治の後今より鬼無おにな
き里といふ意の号なりとぞな(已上割注)

(以下地形の絵図の頁・絵図を略し文字のみ載せる)

戸隠奥院并裏山之圖とがくしおくのいん
うら

其一

黒姫山	地藏	ミロク	ヤクシ	クワンヲン
セイシ	普賢	文珠	シヤカ	フドウ
黒姫山	大岩			
種池	ウラ山道	境の宮	越後道	わく池
瑪瑙山	積長明火定所			

(絵図終わり)

(以下地形の絵図の頁・絵図を略し文字のみ載せる)

其二

アミダ	アシユク	弁才天	小イケ	大日	礼盤石
コクウゾフ	水晶多宝	チエクツ	妙汰屈	般若屈	

塔幡 ヤクシ屈 經藏屈 雷ノ岩 日中屈 法法ゴマ所
アカ水 神輿庫 中ノ屈 大天狗屈 小天狗屈 本社
五色屈 兒塔 さかさ川 二王門 坊 観音

(以下地形の絵図の頁・絵図を略し文字のみ載せる)

詠藻

うこきなき 高みぐら山 いのりおきつ おさめん御代は
神のまにく 俊成

八尺円鏡 マンタラ岩 二本杉 象窟 三重塔
虚空藏 獅子窟 西屈 九頭龍大権現 三層窟
長岩デン 不動屈 軍荼利 毘沙門屈 愛染屈 大威徳
降三世屈 金剛夜刃 大勝金剛 帝釈窟 歡喜天 仙人窟
木曾殿古跡 大岩デン 切部王子 御供所 坊

(絵図終わり)

○戸隠御裏山中院よ
り七里乙妻山高妻山是を劔の岑といふ又両界山
とも称す金胎両部の曼陀羅を地に敷たるを以て名とすとぞ
故に参詣の輩此登口にて草鞋を替るいつの頃よりか道通に
十三仏を置いて順路を示す各青銅佛にて不動尊のみ石像なり
例年六月朔日より七月晦日までを御山明とて登山をゆるす

中院より八丁目に右へ越後の分れ道有夫を一里半行て又

左へ御裏山への分道にて登口也越後道を直にゆけば大池

二ツ有右を湧池左を種が池と云大岩境の宮等あり此邊ハ酒其外青物等を越後

より運送
するなり

○投の忝五葉にて葉短し地藏の邊より始りて奥へ續き七谷に延わたり

て繁茂し蔓の如く其本を知ることなし登山の輩ハ此葉を採

て帰る難産并齒の痛等に功能著しと也○古池九勢至の先にあり登山の

者多くハ中院まで日帰にするもし嶺に通夜の輩ハ礼盤石よ

り小池の弁天迄歸て池水にて粥を焚く薪にハ投の忝を手折

て用ゆと云昔は此所に籠屋ありしが雪に潰れて今ハなし○

禮磐石大日の側にあり虚空藏までハ行難し此所にて谷を隔て八尺の圓

鏡曼陀羅岩を拜む礼盤石にて行止りなり

○二季の祭礼ハ四月七月也四月十五日奥の院十六日宝光院十

八日中院也三谷の坊中参集して誦經神主栗田氏参勤又戸隠

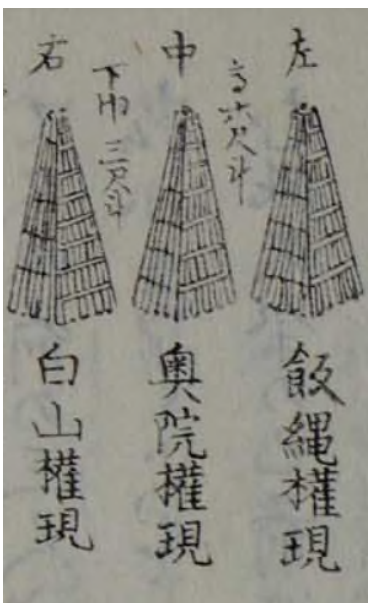
派の修験とて三十余人あり信越両國の間三四十里四方に散

在せり此輩四月十七日に登山して十八日中院の祭のみ相詰

祭終て本坊へ参謁す山伏の内もし差合等にて登山無の時ハ其訳本坊へ相断なり七月八日ハ中院十日ハ

宝光院十五日ハ奥の院以上三ヶ日とも火祭也三谷の坊中参

集読経神主参勤あり扱火祭の次第は



左（凶略） 飯縄権現

高六尺斗

中（凶略） 奥院権現

下巾三尺斗

右（凶略） 白山権現

三谷とも廣前に如此順に立る但飯縄白山ハ隔年に左右かハるなり中院ハ三本とも竹にて拵る宝光院ハ三本とも木にて拵る此故ハ宝光院門前七十軒程の者ハ年中木を伐出すを渡世とす中院門前八十軒斗の者ハ竹を伐出すを渡世とすかくのこことく官家より御免札あり奥の院柱忝ハ両院の門前より立る故に一本半ハ竹一本半ハ木也三本の柱忝に神名を号する事古例にて其いはれ知がたし

圖の如く片方に足留を着て三本立並ぶ是を柱忝といふ三

谷坊中にて一人づゝ當番を定む是を先達と云扱先達の院

にて幣（へい）此弊の製ハ一本を紙一帖にて作る一ト谷にて三本ツゝ銘々神前にて作る三本を一手に持て三人へ一度

に渡す受取と等しく神前へ走る（はし）是に遅速の勝劣あり神前に立並べ先達の

唱辞亘終て又以前の三人へ渡す直に柱忝へ近て投上るを

上うへにて受取柱松うけとりしらぎに立て火うつを燧たきて焼く其焼方かちまけありに勝負有て年
の豊凶ほうきやうを定む此火祭さだの已前なぎなたに長刀しあいの試闘これもちしやうぐんあり維茂将軍鬼
神退治これいの古例これいなりといふ坊中弟子こうもの中にて衣たまだすきに玉襷かけを掛
て戦たたかなり八日には中院ふたふりより長刀二振寶光院たかひかりより一振十日
には宝光院たかひかりより二振中院ふたふりより一振出る但し長刀一振に法師二人づゝ出る十五日に
は奥の院かぐらハ長刀おやうじつの夏かぐらハなく火祭おやうじつのみなり同月三谷だに太々
神樂かぐらあり定日じゆんばん十八日なり一年ハ宝光院おやうじつ一年ハ中院じゆんばん一年ハ
奥院おんいんと順番しゆぎやうに神前たてわきどうしよくにて執行ごんぎやうあり又八月五日ハ中院ごんぎやうばかり
にて執行ごんぎやう神主栗田たてわきどうしよく帯刀同職ごんぎやう十人程ごんぎやうにて勤行ごんぎやうなり
○飯繩いひづなの里宮りのみや是日の御子の未申に在りハ三谷さんやより一人もツゝ三人もにて一年
づゝ年番もちにて持もちなり
△御裏山ごりさんにハ藁草やぐさう多く蒼木白木黄連其外夏秋ハ藁草とるを採人とる多し又桂かつらの木
斗ばかりの一谷ひとつたに有善光寺堂普請ふしん等にハ買取かいつりになる難所なんじよにて出いだし
がたき嶮岨けんそなりといふ

戸隠詣

善光寺別當権僧正孝寛

上畧

さいつ比ひより雨降あめらざる事六十餘日水みづかれ土つちかはき
て草木くさきハさら也人民たみのかなしひあへるさまいはんか

たなし一里あまりへたてゝ四方の里くは折よく夕
立などして潤ひしが善光寺の境を限りたる事のさり
とてはいかならん爰に九頭権現は龍王にましましては
雲をおこしあめをくたし給ふ事神力自在なりまいて
慈悲ををもとゝしたまへバ廣きみいつくしみにへだ
てあらんやハかゝる願をとみにうけひかせ給へとて
本のみちかひをもたのみつゝかくなむ

神もきけよそにハさそふ雨雲のねかふ里にはな

とかゝらなん

ねかふこと十か九つこゝのつの龍のかしらの神

ならハきけ

とねきことして本宮にまゐりて奉納のこゝろを

引明し岩戸を神のかくしおきて日影あらたに代

を守ります

かくして御供所にいたる観法院迎へいれて素よりの
むつひなれば何ぞハと神酒なんどいたゞかせもてな
さるゝ夏中略いとしたりき

名も知らぬ草のおほかり是こそつとにせめとて二も
と三もとひきとらせて申の刻比中院の本坊に歸り着
ぬしはらく休ふほどに俄に空かき曇り雨ふり出て車
軸を流すが如しこ八九頭龍権現の感應の雨なりと人
く罵りあへり中畧廿日とく起出て見れば雨ハきの
ふのまゝをやみもなくふりしきる爍雨客襟冷也など
独こちて着るものめしよせ打かさぬけふは中院権現
の太々神樂にてあるじも出ぬ召つれたる者もおかま
せにまゐらする午の刻ばかりにはてゝまかりぬ下畧

○戸隠山の西南に鬼無里村あり土倉村嶺などいふ所を越て
戸隠山を右に見て黒姫山に出越後いでにいたる間道あり永祿
年中牧の寫の城に武田より馬場美濃守を置おきて越後の押と
するは是が為なり世に戸隠山を浦見の山うらみといふは此處な

り○浦見の山八雲御抄に
信濃とす

夫木

尋はやこゝろのすゑはしらすとも人をうらみの山

の通路

從三位 為實

○鬼無里の南に大塔といふ所あり今大道
峠に作大塔記に應永七年

小笠原長秀おがさはらながひで
小寫井川の館政長の孫長基
子世に三義一統の作者とす信濃守にて下向げかうの時伊奈郡

より佐久郡にかゝり善光寺にいたる時に國人と不快ふくわい
の事出来て同く九月更科郡塩崎の要害に楯籠りて合いでき
戦におよぶ伊奈一郡味方として一日四度の戦ひに長せん
秀終に討負水内郡大塔の古要害に逃入しかも兵糧乏つひ うちまけ
しくて上下の飢渴廿余日におよぶ長秀の手の勇士三きかつ
百余人悉く討死なり此時佐久郡耳取の主大井治部少ひらいて うちじに
輔光矩和議を入れて漸く軍散ずかくて長秀は舍弟政康みつのり わぎ やうや いくささん
を濃州土岐より呼返して惣職を譲り上方に退去と き よびがへ そうしよく ゆづ かみがた
いはく頼阿信濃の名所見んとて長秀に伴ひ下りしにとん あ めいしよ ともな くだ
思ひの外に事起りて籠城のうちにおいて窮阨言語にろうじやう
絶たり姥捨山の詠此時にありと記せりたへ えい しる

艸菴集

よしさらハなくさめかぬる身のうさを姥捨山の月

にかこたん

九月十三夜
姥捨山を
越えると
て

こよひしも姥捨山を眺れハたくひなきまです
める月かな

とん あ ぞんじやう

按應永中頼阿存生ハ非也

頼阿藤原道長公孫師實公之後俗名貞宗出家ノ号
ニ將尋ト一後号ニ頼阿トニ階堂下野守光貞子也

(以下酒盛りの絵図の頁・絵図を略し文字のみ載せる)

たいらのこれもち さだもり をひ せいじんよごしやうぐん しよう あうしう
平維茂は貞盛の甥なり世人餘吾將軍と称す奥州にありし
もろたう うち むめいきんごく
時藤原の諸任を討ほろばし其威名近國にふるふそのころ
しんしうとがくし もみぢ いうらん えうき びじよ へん
信州戸隠山の紅葉を遊覧したまひけるに妖鬼美女と変じ
いのち
て維茂の命をうばふんとすしかる所に八幡大菩薩の灵夢
はちまんだいぼさつ れいむ
によりてつひにその妖賊を亡し給ひ御身に恙なかりしと
えうぞく ほろぼ つが
なり

山寺に月まつほとのもみちかり般若湯てもちと出よかし

六樹園

山里に紅葉狩してのむ酒は鬼ころしとそいふへかりける

艸々庵

(絵図終わり)

でん ていぢ
傳ニ云貞治二年の頃七十餘歳攝政良基公に會して愚
もんけんちう あらは しやうふう きかん
問賢注を著し正風の龜鑑とす後雙林寺にて寂す八
そうりんじ じやく

十四歳 東野州聞書に忌
日三月十一日

けいやうぶんしう ひい
又迎易文集を引て仰蔡花院ハ平生棲息之閑地終身
へいぜいせいそくのかんちしうしん
あんしんのいうさうなり
安心之幽莊也 頓阿五 句願文 應安五年四月日弟子泐印大和尚位

少僧都経賢敬白と見へたれば頓阿は應安中遷化疑ひ
なかるべし

堯恵法師紀行

上畧
土圭の影うつるばかりに戸隠山へいたりぬ二重の瑞
籬を拝して奥の院へのぼるに畳たる山のうへにす
ぐれて中臺に南北ふたつの嶺ありおのく重々に
岩をかさねあげて八色をましへたり千峯萬山のかた
ちのうち霊木異草かさなりて或は佛菩薩の来化の
姿もあり或は天人聖衆の妓樂をととのへたる所も
あり併観音薩埵の勝地にてそ侍らん社頭は北の嶺
の半にさしあがりて東に向ひ大なる岩窟の内へ造
り入たりかの御神は多力雄にてましますそのこゝ
ろを

瑞籬やしたつ岩ほに忝かねのたてるも神の力と
そ見る

おなし所にて

吹おろす嶺のあらしもまきれ行ひきや谷の戸

隠の山

十六日に又快藝の山室とまりぬ下畧

註 新日本古典籍総合データベースの「善光寺道名

所圖會他, 国文研, ヤ6-38-1~5, 刊, 5冊,

大, 国文研蔵」(DOI 10.20730/200005268 書

誌 ID 200005268)192 コマ目から206 コマ目。

「信濃史料叢書」21巻に翻刻がある。

善光寺道名所圖會卷之五

人皇六十三代冷泉院の御宇安和二年當國戸隠山れいぜい あんわ とかくし くわつきに活鬼紅葉もみじ

といふ妖賊住ようぞくすん しんみん ざんがい くわうちやうで人民を殘害す此由 皇聽きうとうに入れハ急たいぎ退

治ちすべしとて平維茂たいらのこれもち ちよくめいに勅命ちよくめいあり維茂まづ北向きたむき觀音ひよしはち日吉八

王子わうじ権現きぐわんに祈願こめを籠戸はつかう隠ぞくしゆへ發向はつかうし賊主ぞくしゆを打取うちとりしかバ活鬼

紅葉こうもみぢの魂魄こんぱく大天狗だいてんぐ小天狗せうてんぐと形かたちをあらハし八丈坊はちぢやうぼう九丈坊くぢやうぼうと名な

乘日のり吉権現きちくわんの眷属けんぞくと成なりり北向山きたむきを守護しゆべいせんと誓ちかひけり維茂

輒たやすく賊徒ぞくとを亡ほろぼし民たみの患うれひを除のぞきしかバ 帝叡みかどえい感斜いかなのならず維茂

を將軍しやうぐんに任にんじ信濃しんぬ甲斐かい越後えちごの太守たいしゆとなし玉たまひぬ因茲いんし惟茂ただ茂將

軍當國きよたけ松尾まつおに居城きよじやうを構かまへ大悲殿だいひでん瑠璃殿るりでん日吉しんしの神祠のこうす其外そのほか不殘

再建さいけんし別べつに六十坊ろくじゅうぼうを建立しんじゆし支坊しぼうとなし玉たまひ七堂しちだう伽藍がらんの靈場れいぢやう

にて三樂四院六十坊と称す惟茂將軍一千貫文の地を寄附し
玉ひ、淳和清和兩帝より寄附し給ふ二千貫ともに塩田三千
貫文の地を當山領となし給ふ猶此里に別業を造営し別所と
呼たまひしより里の名となれり、

註 新日本古典籍総合データベースの「善光寺道名
所圖會 他, 国文研, ヤ6-38-1〜5, 刊, 5冊,
大, 国文研蔵」(DOI 10.20730/200005268 書
誌 ID 200005268) 260コマ目から262コマ
目。「信濃史料叢書」21巻に翻刻がある。

善光寺道名所圖會卷之五

○信濃國內の事物を謡曲に作れる目録

- 紅葉狩○木賊○柏寄○望月○寢覚○土車○犀川○柳川
- 伏屋○雪翁○飛雲○海野○更科○更科物狂○戸隠○思妻
- 高梨○見渡鈴○善光○木棧○姥捨○神宮寺

右廿三番なり猶此外にもありや尋ぬべし
以上ハ彼地にて人の藏書をうつし侍る

註
新日本古典籍総合データベースの「善光寺道名
所圖會他, 国文研, ヤ6-38-1〜5, 刊, 5冊,
大, 国文研蔵」(DOI 10.20730/200005268 書
誌ID 200005268)292 ヲマ目。「信濃史料叢書」
21巻に翻刻がある。